

1B-67) Dodge ball による頸部外傷により脳幹梗塞を生じた1小児例

妻沼 到・寺林 征
 本道 洋昭・河野 充夫
 渡辺 徹・小股 整 (富山県立中央病院) 脳神経外科
 杉山 義昭

頸部の過伸展、急激な回旋などにより稀ながら内膜剝離・内膜下血腫・偽性動脈瘤などの椎骨動脈損傷を生じ、閉塞・塞栓などにより時に重篤な神経症状を呈する事が知られている。今回我々は、dodge ball による頸部外傷により脳幹梗塞を生じた一小児例を経験したので報告する。症例は9才男児。Dodge ball が右前頸部にあたり、下顎がしゃくり上げられ、約10分後に意識障害が出現し入院。傾眠傾向・構音障害・左片麻痺を認めた。MRIで、橋中上部傍正中右寄りに梗塞巣を認め、脳血管撮影では、脳底動脈の完全閉塞および左椎骨動脈 C₁ C₂ 椎体レベルに、偽性動脈瘤と思われる所見を認めた。抗血小板剤投与により保存的に加療。第45病日に再検した脳血管撮影で、脳底動脈の閉塞所見は不変、左椎骨動脈の偽性動脈瘤は消失していた。患児は軽度の左片麻痺を残して、入院2か月後に退院した。頸部の過伸展により椎骨動脈損傷を生じ、そこからの塞栓により脳底動脈閉塞をきたした症例と考えられた。

1B-68) 脳幹部膿瘍の1例

小林 勉・亀田 宏 (立川綜合病院)
 福田 光典・中里 真二 (脳神経外科)

臨床の場においては、脳膿瘍は決して希な疾患ではない。しかし、その発生部位ではほとんどがテント上に多く、後頭蓋窩の特に脳幹部においては希である。治療の面から以前では困難を極め生命予後は厳しいものであったが、近年定位脳手術の開発により優れた報告がなされるようになってきた。

我々は顔面の知覚障害にて発症した脳幹部膿瘍を経験し、定位脳手術により良好な結果を得た。以前までの報告と対比しながら、文献的考察を加えここに報告する。

1B-69) Spike-wave stupor の2例

小泉 孝幸・外山 孚 (長岡赤十字病院)
 増田 浩・酒井 雅史 (脳神経外科)
 佐々木 修 (桑名病院) 脳神経外科

Spike-wave stupor と考えられる臨床像を呈した2

例を経験したので報告する。

症例1：53才、男性。全身痙攣で初発し、入院となった。入院後3日目より、精神活動遅鈍化、発動性低下、言語停止を認めるようになった。脳波では、全汎性両側同期性棘徐波結合を認めた。また、脳 SPECT 上は、両側前頭葉内側面に軽度低灌流域を認めた。症例2：65才、女性。前交通動脈瘤破裂にて、clipping を行われている。1年後意識消失発作があり、再入院となった。入院後精神活動遅鈍化、言語停止、右手の脱力などを認めた。脳波上は、両側同期性棘徐波結合を認めた。また、脳 SPECT 上は、両側前頭葉に低灌流域を認めた。

Spike-wave stupor における全汎性両側同期性の棘徐波の起源として、中心脳性及び皮質性の2つの機序が考えられている。今回の症例の脳 SPECT 所見からは、皮質、特に前頭葉内側面の関与が示唆された。

1B-70) 難治性てんかんに対する脳梁切離術の経験

山崎 英俊・亀山 茂樹
 本田 吉穂・川口 正 (新潟大学脳研究所) 脳神経外科
 田中 隆一

難治性てんかん6症例に対し脳梁切離術を行ったので報告する。

【症例】薬剤難治性の Lennox-Gastaut 症候群3例、前頭葉てんかん3例で、平均27才(14~42才)である。術前後に、EEG、SPECT、言語精神機能検査を行い、手術の効果を検討した。Follow-up は、平均16か月(3~26か月)である。【結果】手術は脳梁の前方1/2から2/3の切離を行った。術後、活動性低下が一過性に認められたが、永久的な脳梁切離断症状は認められなかった。脱力発作、強直間代発作等の重篤発作がコントロールされて、excellent：1例、good：3例、fair：1例、poor：1例であった。術後は、発作の軽快と共に大脳半球の血流改善、IQも約10ポイント平均の改善があり、神経症状の改善も認められた。【結語】薬剤抵抗性の難治性てんかんに対し、脳梁切離術が有効であった。術後に脳血流の改善が認められ、知能低下を来す前に積極的に治療することの意義が見い出された。